

小論文試験問題

・解答上の注意

1. 問題文は5枚、解答用紙は1枚（表・裏）、下書き用紙は1枚です。
2. 解答用紙には、一橋大学の受験番号を記入し、氏名は記入しないでください。
3. 解答は横書きにしてください。
4. 解答用紙は、受験番号を記入する面が表になります。問1を表に、問2を裏に解答してください。
5. 解答用紙の追加、交換はしません。
6. 解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字の訂正のほかは使わないでください。
7. 問題の内容についての質問には、応じません。
8. 試験終了後、問題文と下書き用紙は、持ち帰ってください。

(平成17年11月27日実施)

小 論 文

問題文AおよびBは、ともに、阿部謹也『西洋中世の愛と人格―「世間」論序説―』（1992年）からの抜粋であり、Aは「Ⅰ 世間と社会」、Bは「Ⅱ 個人と人格の成立について」と題する章の一部である。AおよびBを読んで、次の問に答えなさい。

問1 問題文Bにおいて、西欧と日本の「個人」のあり方の相違の問題に即して言及されているカントの「公私」論（理性の公的使用と私的使用に関する議論）は、今日の日本社会に普遍的な「公私」観念とは異質である。この異質性が、問題文Aにおいて論じられた「社会」（西欧）と「世間」（日本）の相違とどのように関係するかを考え、彼我の「公私」観念についての小論文を作成しなさい。その際、意味のまとまりごとに小見出しを付すこと（小見出しには〔 〕を付し、その後2文字空けて文章を続けなさい）。句読点も1文字に数え、1000字以内とする。

問2 問題文AおよびBのそれぞれを、要約しなさい。Aの要約は解答用紙1行目から14行目まで、Bの要約は解答用紙16行目から終りまでとする（15行目は空欄とすること）。問1と同様に、句読点を1文字と数えること。

[問題文A]

社会は個人から成り立つものとされている。したがって実状はどうあれ、それぞれの個人は、社会の構造、運営、将来について責任をもつものとして意識し、行動していることになっている。しかしながら、このような意識は明治以降に輸入されたものであり、現実の日本人の多くは、社会を構成する個人としてよりも、世間の中にいる一人の人間として行動している部分の方が多いのである。

世間と個人の関係について注目すべきことは、個人は自分が世間をつくるのだという意識を全くもっていない点にある。自己は世間に対して、たいていのばあい、受け身の立場にたっているのである。個人の行動を最終的に判定し、裁くのは世間だとみなされているからである。「世間」という言葉が定義しにくいのは、世間は常に個人との関係において、その個人の顔見知りの人間関係の中で生まれているものだからであり、人によって世間が広い人も狭い人もいるからである。したがって個人ごとにさまざまな世間があり、日本には数えきれないほどの世間があることになる。ときには身内以外にさしたる世間とのつきあいもなく暮らしている人もいるのであるが、それでも世間の評判は気にかかるのである。

欧米人は日本人を権威主義的だとみることが多いが、それは日本人が常に世間の目を気にしながら生きており、彼らから見ると個性的ではないようにみえるためである。日本人はできるだけ目立たないように生きることが大切であると考え、自分の能力も必要以上に示さないようにする。日本人が何よりも怖いと思っているのは「世間」から爪弾きつまはじされることだからである。その怖いと思っている態度が欧米人には理解しかねるのであって、それは彼らには「世間」が理解しかねることと同じ根をもっている。

個人の性格にもよるが、世間の中で暮らす方が社会の中で暮らすよりも暮らしやすく、楽なのだ。そこでは長幼の序、先輩・後輩などの礼儀さえ心得ていけばすべては慣習どおりに進み、えたい得体のしれない相手とともに行動するときの不安などはないからである。さらに世間の中での個人の位置は、長幼の序や先輩・後輩などの序列で一応決まっており、能力によってその位置が大きく変わることはあまりない。個人が世間に対して批判をしたり、不満を述べるがあっても、世間のルールは慣習そのものであり、せいぶんかなんら成文化されていないから、不満も批判も聞き流されてしまうのである。

日本人の多くは世間の中で暮らしている。しかし日本の学者や知識人は「世間」という言葉から市民権を奪い、「世間」という言葉は公的な論文や書物には文章語としてほとんど登場することがない。「世間」という概念を学問的に扱わなければならないはずの日本史学においても、まともに世間を論じた人を私は知らない。吉川弘文館の『国史大辞典』には「世間」という項目すらないのである。現実の日常生活では世間の中で暮らしているにもかかわらず、日本のインテリは少なくとも言葉のうえでは社会が存在するかのごとくに語り、評論家や学者は、現実には世間によって機能している日本の世界を、社会としてとらえようとするために、滑稽な行き違いがしばしば起きているのである。このことは政党や大学の学部、企業やそのほかの団体などの人間関係のすべてについていえることであり、それらの人間関係は皆そこに属する個人にとっては、世間として機能している部分が大いなのである。個々人はそれら世間と自分との関係を深く考えず、自覚しないようにして暮らしているのである。

日本人の一人一人にそれぞれ広い狭いの差はあれ、世間がある。世間は日常生活の次元においては快適な暮らしをするうえで必須なものに見えるが、その世間がもつ排他性や差別的閉鎖性は公共の場に出たときにはっきり現われる。たとえば何人かで旅に出るために列車を待っているとしよう。列をつくっているばあいも、何人かのうちの一人が先頭に並んで、あとからきた者もその先頭の一人のあとにぞろぞろと割り込んでくることが多い。このようなとき、私たちは自分たちの仲間の利益しか考えていないのである。あるとき電車の中で私は中年の女性に席をゆずった。二駅ほど過ぎてその女性のとりの席が空いたとき、その女性は遠くに座っていた仲間を呼び寄せて並んで座り、「二人とも座れて良かったね」と話し合っていた。彼女たちにとってそのとき、二人だけの世間が形成されており、まわりの人間のことは全く彼女たちの考慮の中に入っていないのである。このようなことは日本では日常的にみられることであり、電車の中で宴会を始めたり、騒いだりする人たちは常にどこでも見られるのである。このような事態に対して、日本人には公德心が足りないとかいろいろいわれるが、問題は公德心ではなく、ここでつくられている仲間意識が、多くの人たちによって是認されているという点にある。

そのようなとき私たち日本人には、自分たちが排他的な世間をつくっているのだ、という認識がほとんどないのである。

学者であれ、ジャーナリストであれ、もの書きが日本の過去、現在、未来について語るばあい、自分がどのような世間に立脚して語っているのか、を自覚していないために前述のような行き違いが起こるのである。そこでももの書きに最小限求められることは、発言するばあいに自分がどのような世間に立脚して語っているのか、を自覚して語ることなのである。もし自分はいかなる意味でも世間に立脚していない、と思う人がいるならば、まずそのことを明らかにすべきであろう。日本の学問の宿痾ともいべきものは、社会と世間のこの両者の関係を曖昧なものにしてきたことにあるからである。いいかえれば、日本の学者は西欧近代的な意味での個人になっていないのに、あたかも西欧の近代的な意味での個人であるかのごとくに語ってきたのである。学者やジャーナリストによって、新聞や総合雑誌に戦後数十年の間、どれほど多くの日本論や近代化論、資本主義論、社会主義論が発表されてきたことだろう。にもかかわらず、それらの論文によって現実の事態が決定的に変わることがなかったのは、それらの論文を書いた人が、日本の社会に牢固として抜きがたく存在しているそれぞれの人の世間に立脚しながら、日本の社会に即して発言してこなかったからなのである。つまり自分の足場を自覚していない人の、ただの文字、言葉にすぎなかったからなのだ。

世間に属しながらも、個人として、社会に対して責任ある発言をすることは可能であろう。しかしそのためには、少なくとも自己がどのような世間に属しているのかを自覚していなければならない。自分が属している世間との関係によって、自分の視野や分析視角がどのように規定されているかを自覚しているばあいは、観察にある程度の客観性が生まれる可能性があるからである。

社会という言葉を用いて抽象的に語るときは、自己のよってたつ世間を忘れ、いくらでも博愛主義的ヒューマニスティックになれるが、具体的な行動を伴うときには、世間に即して考えなければならないために、ヒューマンイズムの影も見られないことが多い。日本人の世間は、常に排他的で、差別的な構造をもっているからである。わが国の被差別部落に対する差別の問題も、現代に関していえば、日本人の世間がもつ差別的構造に由来するところが大きいのではないかと私は考えている。差別をなくすことは、世間の解体あるいは拡大によることなしには困難ではないかとさえ思っているのである。大切なのは、わが国では、「社会」と「世間」という二つの用語の世界があるということ、まず認識することである。「社会」はいわば近代的な用語の世界であり、貨幣経済を軸とする表向きの構造をもっている。他方で「世間」は主として対人関係の中にあり、ここでは貨幣経済ではなく、贈与・互酬の原則が主たる構造をなしている。一人一人が、なんの根もない普遍的な立場で語ることしばしとどめ、社会と世間との関係について考えるべき時がきているのではないだろうか。

【問題文B】

日本の社会における個人の生き方・出処進退を、社会科学の対象としてとらえようとしたとき、その生き方の意味するものや世界史における位置などについて語ることは、必ずしも不可能ではないであろう。私たちは明治以後、近代学校教育の中で、

自分を個人として意識し、一つの人格をもつ存在であることを学んできた。そのばあい、人格とは何か、とか、近代以前において日本人は個人の人格をどのように考えてきたのか、などと問うこともなく、私たちは過ごしてきたように思える。とくに周囲の人間関係の中で、一個人が自分の人格をもちつつ生きることの意味について、深い省察はなされていないように思われるのである。個人であることと、日本の社会の中に適応して生きて行くこととのズレが問題なのである。私たちは、高等教育を受けたのちは、そのズレに疑問をさしはさむようなことも機会も少なく、自分が西欧的な意味での一個の人格をもつ存在であることを前提として、すべての問題が立てられ、答えられてきたように思える。そのような自分を意識しながら、ヨーロッパ史を観察してゆくとき、ヨーロッパにおける個人の生き方と日本における個人のあり方との間に、明らかなズレがあることに気づかざるをえないのである。

一つの例をあげれば、カントは『啓蒙とは何か』の中で、「自分自身の悟性^{ごせい}を使用する勇気をもて」と述べ、それこそが啓蒙^{けいもう}である、と述べている。そして啓蒙を実現するために必要なのは自由であり、自由を行使しうるのは、次のようなばあいである述べている。カントは自分の理性を公的に使用する自由について語っているのであるが、たとえば軍人が上官から何かの命令を受けたばあい、その命令が適切か否かを論議しようとするならば、大変困った事態になるであろう。軍人は上官の命令に服従しなければならないからである。しかし彼が軍務を離れて上官の命令の是非を論じ、公衆一般の批判に委ねることを禁ずるのは不当である、という。このばあい、軍人が上官の命令に服するのは、彼の理性を私的に使用したばあいであり、上官の命令を批判する自由は、まさに彼の理性の公的な使用によるものだという。カントはほかに、官吏のばあいと聖職者のばあいについて、おなじ問題をあげ、理性の私的使用について論じている。このような伝統は、現在でも西ヨーロッパにおいて生きており、西ドイツの連邦軍の高官が西ドイツの核配備について批判を加えたのはつい先日のことであった。しかしながら日本においては、このような理性の私的使用と公的使用の区分は、一般的に認められているとはいえないであろう。今日においてなお、企業内部の人間が、一般社会人として企業の不正を暴^{あば}くには、職を賭^とす覚悟が必要であり、警察や自衛隊の内部においては、実際に批判をした人間が処分されている例さえあるのである。

カントは理性を公的に使用するばあい、その人は学者として発言しているのであるから、そのために損害を与えられてはならない、と述べている。しかしわが国では学者ですら、相互の本格的な批判を行うことは極めて稀である。わが国においては、批判が相手の存在そのものへの批判として、うけとめられかねないからである。そこにはカントのいう理性の私的使用と公的使用の区別がなされていないのである。理性のこの二つの区分の仕方には、もちろん問題もあるが、ヨーロッパでは、カントのばあいほど明瞭に区分されてはいないにしても、人間の存在が、公的、私的の両面をもつことについて、すでに古い時代から了解があった。共同体の中における個人の人格の問題として、この問題は、私がこれまで考えてきた問題の延長線上に位置づけることができるのである。

私たちは明治以降、西欧化の波の中で、西欧的な個人を身につけようとしては失望を重ねてきた。ときにヨーロッパに遊び、パリに住み、西欧人になりきったつもりでいても、いつも心の奥底では日本古来の心性^{しんせい}が抵抗している。ヨーロッパにおける個人の位置と日本における個人の位置とのこのズレの存在を、詩という形で表現したのは、高村光太郎である。高村光太郎は、『暗愚小伝^{あんぐしょうでん}』の中で、文明としてのヨーロッパ（パリ）を次のように歌っている。

私はパリで大人になった。
はじめて異性に触れたのもパリ。
はじめて魂の解放を得たのもパリ。
パリは珍しくもないやうな顔をして
人類のどんな種族をもうけ入れる。
思考のどんな系譜をも拒まない。
美のどんな異質をも枯らさない。
良も不良も新も旧も低いも高いも、
凡そ人間の範疇にあるものは同居させ、
必然な事物の自浄作用にあとはまかせる。
パリの魅力は人をつかむ。
人はパリで息がつける。
近代はパリで起り、
美はパリで醇熟し萌芽し、
頭脳の新細胞はパリで生まれる。
フランスがフランスを超えて存在する。
この底無しの世界の都の一隅にゐて、

私は時に国籍を忘れた。
故郷は遠く小さくけちくさく、
うるさい田舎のやうだつた。
私はパリではじめて彫刻を悟り、
詩の真実に開眼され、
そこの庶民の一人一人に
文化のいはれをみてとつた。
悲しい思で是非もなく、
比べやうもない落差を感じた。
日本の事物国柄の一切を
なつかしみながら否定した。

ここには、普遍的な文明としてのヨーロッパに出会った高村光太郎がいる。しかし「出さずにしまった手紙の一束」の中で、同じ高村光太郎は、パリについて次のように書いている。

僕には又白色人種が解き尽くされない謎である。僕には彼らの手の指の微動をすら了解する事は出来ない。相抱き相擁しながら僕は石を抱き死骸を擁してあると思はずにはゐられない。その真白な蠟の様な胸にぐさりと小刀グットウをつつ込んだならばと、思ふ事が屢々あるのだ。僕の身の周囲には金網が張つてある。どんな談笑の中団欒の中へ行つても此の金網が邪魔をする。海の魚は河に入る可からず、河の魚は海に入る可からず。駄目だ。早く帰つて心と心とをしやりしやりと擦り合はせたい。寂しいよ。

ここには、文化としてのパリにふれた光太郎がいる。文明や文化という言葉、私は通常の意味とはちがった内容で使っているのだが、文化とは私の言葉でいえば、モノを媒介とした人間と人間の関係と、目に見えない絆きずなによって結ばれた人間と人間の関係の総体をいう。モノとは、土地や自然、動物や植物、家や道具など、目に見えるもののすべてを意味し、人間が、特定の地域の中でそれらのモノに囲まれて暮らし、それらのモノと不可分な関係を結んでいる、その関係の全体をいう。口頭伝承こうとうでんしょうの世界で現われてくるモノは、すべて特定の名称をもち、大地、森、河や林なども、抽象的な名で呼ばれてはいなかった。口頭伝承の世界の特徴は、すべてのモノが具体的な名をもっている点にある。しかし同時に、信仰や掟、愛情や思想、音楽や感情のこもった言葉などが、目に見えない絆となって、人と人との関係をも媒介していた。この二つの関係の中で、人間関係のすべてが成り立っているのであり、その総体が文化である、といてよいであろう。いわゆる芸術作品や文化財は、この二つの人間関係の総体の中から生まれた結果にすぎないのである。

このようなモノを媒介にした関係と目に見えない絆によって結ばれた関係は、歴史の中では特定の地域で特定の人々によって担われてきたものであって、そのかぎりでもどうしても非合理的なものを包含せざるをえない。余処者を排除し、仲間内なかまうちだけですべての問題を処理し、自分たちにしか解らない言葉によって結ばれた感性の世界があることを確信しているのである。高村光太郎が、「出さずにしまった手紙の一束」の中で接触したのは、このような非合理的で排他的な文化をもつ町としてのパリであった。

しかし光太郎は、他方で、文明としてのパリに出会っている。「暗愚小伝」の詩が示しているパリである。この文明のなかでは、人種を問わず、誰もが受け容れられ、思考のどのような系譜も拒まれず、フランスがフランスを超えて存在するという。ここには光太郎の思い入れもあるだろうが、ヨーロッパが、歴史のある段階で、文化の次元から文明の次元へ飛翔したことも事実である。ヨーロッパが文明の段階に飛翔した時期は、私の考えでは十二世紀ごろを始点とするのちの展開であるが、それは産業革命の後に完成され、全世界がヨーロッパ的思考の枠にとらえられていった。それは感情というよりは、理性によって結ばれた人間の結合関係にもとづいており、合理的で理性的な人間関係が生まれつつあった。文明は、文化と違って、誰にでも開かれる性格をもっていたからである。

私たちの文化は、短歌という古代のコミュニケーションの手段や、相撲という古代の競技が現在も盛んであることに示されているように、古代的な層を強く保存し、それは、日常生活を規定している互酬関係ごしゅうという枠の中で、今でも大きな位置を占めている。日本の社会がもつこのような古代的な特質は、全世界の中において観察してみると、程度の差はあるが、決して日本にのみ固有なものではなく、とくに互酬性についていえば、それは普遍的な広がりをもつものである。私たちは、日本社会のもつ古代的＝普遍的な特質を分析し、それを全世界史のなかに位置づける作業として、世界史を新たに描かなければならないだろう。そのためには、伝統的な歴史学の枠組みは極めて不十分であり、人類学、民俗学、社会学、文学、音楽学、宗教学などとの接触の中から、新しい視野を開いてゆかなければならないのである。

ところで私たち自身の問題についていえば、高村光太郎が「暗愚小伝」で描いているような個のあり方を望みながら、その確立に成功しているとは到底いえない状況にある。私たちは今も、日本社会の古代的な層をそれぞれの中で抱えているのだから、西欧的な個の確立がそのまま現実の日本の社会の中で達成されるはずもないのだが、伝統的な歴史学の枠組みの中では、この点が十分につめられていないように思われるのである。このような状況の中で、同じく古代的な層をもっていたにちがいない西欧社会では、個がどのようにして確立していったのか、という問いが自然に出て来るであろう。西欧社会も、光太郎が「出さずにしまつた手紙の一束」の中で垣間見たように、独自の文化を抱え、その限りで何がしか古代的な層をもっていたからである。

[阿部謹也『西洋中世の愛と人格―「世間」論序説―』（朝日新聞社、1992年）による。小見出し及び注は省略した。]